(表紙)

家譜 慶永公

到同年十二月 従明治十一年

一百十巻追加

七

月

明治十一 年

卿江御勤, 参朝御拝賀、 時 `御大礼服御召替御祠堂御供饌ュ・水・鯛御拝相済六時御出門 月一日年始御式御近例之通新年御拝賀二付午前四時御目覚、 御退朝掛青山御所建宮江御参賀、 先
ら
両
大
臣
及
宮
内 御 五.

+

時御帰邸被遊候

同日午前十時過御方々様御揃表御座之間御着床、 令扶従及奥女中

壱統御祝詞申上之

但当年ハ御相殿後初而之御式也、 様御手酌被成下、 御取肴玉子・樒柑賜り候 御近例之通屠蘇頂戴、 御方々

月五日新年宴会二付御参朝被遊

月六日華族会館新年開館式二付御参館、 左之通御祝詞御述相成

候

テ本館ノ事業各其当ヲ得テ、 稍進歩ノ功ヲ得ントスルニ至ラン

華族会館創設以来年ヲ閲スルニ僅カニ数年ニ過キス、

然リ

而シ

力同心ノ然ラシムル所ナリト雖トモ、 トス、真ニ賀スヘク実ニ祝スヘキナリ、 亦大イニ聖諭 是固ヨリ同族諸君ノ協 漫渥ナル

> 躬勉励以テ無量ノ聖恩ニ奉答セサルヘカラス、 ニ是レヨラサルヲ得ンヤ、 然ラハ則予輩該事業ニ於ケル倍々鞠 爰ニ新禧開館

福安寧ヲ賀ス

期ニ臨ミ聊蕪辞ヲ演シ、

以テ本館ノ旺盛ヲ祝シ、

併テ諸君ノ幸

華族会館特撰幹事

明治十一年一月六日 永

同日松平康倫様御儀去ル十二月 日御逝去之処、 会葬ニ相成候 山浄土寺ニ於テ御仏葬御執行ニ付、 正二位様為御 本日小石川区白 族御総代、

一月八日松平直静様今般御妾腹之御男子御出生之処、 疋、 正二位様江御依頼ニ相成即直幹様と被進、 御副御家令武田正規御使二而御名目録被進二相成候 為御祝儀御肴料金三百 御命名之儀

月九日松平確堂殿ゟ左之御願書御捺印御依頼ニ 付、 御領承 成

候

相続願

一部 一部 華族 松平康倫亡養方叔父実弟

実子無之二付実弟明丸江相続被

付度、 宗族 親族協議之上連署ヲ以奉願候也

従四位松平康倫死去仕候処、

第 正四位松平確堂

印

第 一部華族宗族 -慶 永

印

第 一 従四位松平定安 一部華族親族 印

宮内卿徳大寺実則殿

以 志等御招集御協議相成、 月十六日予而より両公思召ニ而、 銀行設立相成候ハ、可然との御事、 尚御家令武田正規義も同行被仰付、 今般村田氏寿右誘導として福井表江被遣 福井士族財本固定之為禄券を 過日来度々福井出身之諸有 今朝出発ニ相成候

一月廿二日節子様御儀往々康荘様御縁女ニ被為成思召之処、 合之儀表通り康荘様御為ニハ御叔母之御続柄ニ付、 旦松平確堂 御続

御指出二相成候処、 本日御願済ニ 一相成候

更二御貰受之事二御相談相整、

左之通御願書

様御養女ト被為成、

養女願

正二位松平慶永娘節私養父

差遣シ、 右之者東京府華族従四位松平康倫養祖父正四位松平確堂養女ニ 更ニ貰受、 行々私倅信次郎江配偶為致度、 元来養父慶

之候間、 永娘節儀ハ信次郎為ニ伯母続キニ相成候得共、 何卒御聞済之程相願度、 依而宗族・ 親族連署を以此段 其実素血縁 ハ無

\*

奉願候也

明治十年七月十三日

同宗族従五位松平直方 第 |部正四位松平茂昭

同親族従五位松平直静

宮内卿徳大寺実則殿代理

宮内大輔万里小路博房殿

「願之通 明治十一年一

月十一 日

月廿三日

松平確堂様鶏卵 壱箱

右者御養女御願済ニ付御挨拶トシテ被進ニ相成候

鶏糸卵織

鶏卵

壱箱

壱壱 箱反

松平正直

堤 正誼

右者節子樣御養女御願之儀二付、 彼是心配致候二付被遣相成候

月廿五日

池田輝知様ゟ 南部織壱反

同 幸姫様ゟ 八丈縞壱反

御惣容様江 鯛弐尾

右者輝知様御儀今般鍋島幸姫様御婚姻無御滞被為済候処、

婚儀ニ付而ハ、 正 一位様前後御紹紒も被為在候ニ付、 為御申謝

被進相成候

月廿七日

鍋島直大様ゟ 交御肴壱籠

右者幸姫様池田様へ御縁組之儀ニ付、 何廉御心配被成進、 無御

滞御婚姻も被為済候ニ付、 為御申謝被進相成候

月廿九日

茂昭儀近来脚気ニ付、 今般豆州熱海温浴之儀相願、 許可之上ハ

速二発程之積二候、 右ニ付銀行株券譲渡ヲ始該件 ハ茂昭江御委

托相成居候故、 右留守中ハ定安殿江御取扱之儀及御依頼候間

此段申入候也

但シ御廻状ハ族長ニ而申上候廉ハ無之候間、 左様御承知奉願

候也

明治十一年 一月廿九日

松平慶永

月廿九日

(金弐拾円

右者御側仕ふち今般松平家江送籍相成候ニ付、 思召を以御送与

ふち父粕屋十郎兵衛

相成候

月三十一日御側仕ふち義今般御妾ニ御貰受相成候ニ付、 本日華

族会館江左之通御届書御指出二相成候

三拾五番地東京府第五大区六小区下谷西町 粕屋安張妹

右今般私養父慶永妾二貰受候間、 此段御届仕候也

明治十一年一月卅 日 正四位松平茂昭

東京府知事楠本正隆殿

妾貰受御届

三拾五番地 東京府第五大区六小区下谷西町

粕屋安張妹

本年廿二年二ケ月

松平慶永

明治十一年一月三十一日

右今般私妾二貰受候間、

此段御届申上候也

宮内卿徳大寺実則殿

代理宮内大輔万里小路博房殿

二月三日正四位様今午前八時御出門ニ而熱海温泉へ御発途被遊候

扈従伊藤 輔

山本

右熱海御湯治御留守中、 正二位樣御留守御心得御届二相成候 本

一二月廿二日元尾張様ニ而公之御伯母貞慎院様七回御忌御相当ニ付. 二月十六日元御住居浅草橋場町真崎御邸之儀、 二月廿七日正四位様熱海温泉より昨夜小田原御泊ニ而、 同日 御参詣相成候 細正四位樣御譜中江記載之 於西久保天徳寺御法事御執行為御知二付、 五時過御帰館 会計主務長谷川皎御同邸江御差越二而同人江附渡無滞相済候、 ニ相成居候処、 右者節子様御儀確堂様御養女ニ被為成候事ニ付、彼是心配候廉 ヲ以被下ニ相成候 御菓子 御花 御香奠 白奉書紬壱反 随従帰邸 壱筒 今般高知県士族小野義真江御譲相成候ニ付、 金弐百疋 松平明丸様御家令 午前九時御出門同寺江 伊藤 兼而御売却御決定 Ш 武 輔 本日午後 本日 三月八日 二月十七日御一族様御令扶集会、支那凶荒救恤金之儀二付協議相 三月十五日村田氏寿・武田正規出頭、 三月十四日 等御招集、 福井表江出張之処本日帰京相成候 先般銀行創立事件御委任二寄 右節子様御養女御願之儀ニ付、 土方久元殿江 右御待受として被進之 正二位様 ( ) 角奉書紬壱疋 御弐所様ゟ 右被下ニ相成候 、御肴料 金壱円、御酒弐升 御酒肴 御酒肴 銀行創立二付福井表事情御聞取二相成候 御世話被為成候二付御贈相成候 青山貞·松平正直·

山本

武

伊藤

輔

村田氏寿

武田正規

堤正誼

成候

御別席 藤波殿 正 親町

殿 伏原殿

高辻殿

同 一月十九日御出生様御養育方ニ付、 人居住手狭ニ付、 新規建継普請御助勢金として金五拾円被遣候 予メ今村坦江御依頼相成候処

三月廿八日 御膳 子等調達候者二而、 御酒 加州粟ケ崎木谷藤十郎・ 御菓子被遣候、 年来殊遇ヲ蒙り候者也 右之者儀ハ従前ゟ御用達ニ而時 同吉次郎罷出両公御逢 々金 畢 前

三月廿八日華族会館部長局より

達

石油裁判事件ニ付前後委細相心得居候者御同道ニ而

四月二日小河一 敏ナル者参邸、 御当家ニ於テ石油社株ニ付御関係

有無問合ニ付、

松平家ニ於テハ決而関係無之趣返答ニ相成候

几

月一日支那公使何如障参邸

両公御逢茶菓御差出二相成

同日御家令東久世殿江参上、 前条石油株主之儀二付而者聊 関係

兀 |月四 日

之旨陳達、

且

石油ニ関スル原因も委細申述置候

明廿九日

証

金百九拾七円也

右清国饑民救恤トシテ松平茂昭以下八名ヨリ出金、 正ニ領受候

也

+ 年四月四日

松平慶永殿

郵便局第

四月五日依召午後四時三十分通常礼服御着用御参朝、 等 侍補 ・ 一階江被為召岩倉右大臣 三条西正二位 御名・伊達従一 ・山県陸軍卿・ 一位・壬生基修 徳大寺宮内卿 午後六時御 元田 佐々木一

高崎二等侍補各着床、 聖上臨御正面御着床、 御談話中西洋料理 御名殿

明治十一年三月廿八日

部長局

午前十時当局

御出頭可有之候也

三月廿九日会館部長局より午前十時正二位様御呼出ニ付、 理 武田正規出頭候処、 石油社之事件則米利堅人ダンなる者同社に 為御代

於テ雇入置候処、 今般該社瓦解之為体ニ付、 右ダン氏給料之儀ハ

但 シ御出席 東久世殿通禧 上杉殿茂憲 Ш T内殿豊範 株主ゟ消却可致との紛紜裁判之一件御尋問有之候也

板 倉殿 南部殿信民

御呼 出 人 九 条殿二而 藤井祐澄 御家二而武田正規

御陪食、 畢而御学問所出御、 岩倉右大臣初被為召カウヒー并ニセ

IJ ] 酒 卷莨御頂戴相成候

四月八日本日春季御祭典二付、 神殿装飾 御祭主正 一位様·副御祭主正四位様御執行被遊候 上野神官杉浦勝雅初伶人三名参邸

四月十一日御簾中様御鬢髮追々御手薄被為入、 より申上ニ相成候 相伺候処、 下し二被成度趣御附女中崎尾より申 御異存も不被為在、 依而思召通り二被遊可然旨御家令 岜 依而御家令より両公思召 且御健剛之為御撫

四月十七日左之通

来ル廿二日芝浜松町於離宮晩餐下賜候間、 午後第五時出頭可有

之候也

督部長

フロックコート着用可有之、 若所労不参之節ハ該族中ゟ代理

松平慶永殿

可指出、 左スレハ其名刺当朝当局へ可被指出候也

右御請

去十七日御達、 明廿 一日於芝離宮晚餐下賜候二 付 午後五時出

頭可仕旨奉謹承候、 右御請仕候条如斯御座候也

廿四類族長松平慶永

兀

月廿

 $\exists$ 

督部長岩倉具視殿

四月廿二日午後三時御出門、 御礼申上候間、 退下ス、○本日洋食下賜候御礼之儀ハ各族長明日参内、 **ゟ第七時十分ニ至ル、** 本日勅語ヲ被下各部長ゟ伝達ス、 寺実則・宮内大輔杉孫七郎・宮内大丞香川敬三・山岡鉄太郎参集 長立花種恭殿・各族長或ハ代理・太政大臣三条実美・宮内卿徳大 督部長岩倉具視殿・副督部長東久世通禧殿・各部長・学習院 各族長ゟ別段不及其儀と二部長南部信民殿申達相 夫
ら
別
堂
二
而
香
菲
又
甘
酒
又
茶
ヲ
賜
ふ
、 小礼服、 追而可相廻、 御馬車芝浜松町離宮江御参 於食堂洋食第六時 宮内省江 畢而

成候

御趣意書

子弟教育等尽力行届候段御満足二被思食、 華族会館設立以来御趣意奉戴、 衆華族を奨励し学習院建設、 依而本日晚餐下賜

四月廿三日今午後十一時御側仕ふち分娩、 機嫌能恐悦之御儀二奉存候 御女子様御誕生、 益御

兀 御依頼書御遣しニ相成候 内意尋問之上、 月廿五日今般鈴木準道御家従江御依頼 弥御請申上 候運と相成候ニ付 付、 即両公より左之通 御家令武田

今般足下家従二依頼致度候間、 乍御苦労上京有之度候、 尚武田

正規ゟ可申入候也

明治十一年四月廿五日

御両名 御印

鈴木準道殿

御家令ゟ之書面

拝啓陳者貴兄今般両公御直書之趣御承諾之上者、 御家族等御引

纏メ御出府相成候様、 尚小拙ゟ可及御通知様御申聞被成候間

御指支も無御座候ハト 直チニ御同 行御出京御坐候様奉存候、 先

者為其拝啓迄如斯御坐候也

松平茂昭殿

明治十一年四月廿五日

御家令武田正規

印

鈴木準道殿

四月廿六日今般御誕生様今村坦方江御預二付、 左之通被仰出之

ニ依テ身体健全之吉例ニ照準シ、 今村坦方江里子ニ差遣スルヲ 先般出生之女子巣鴨村保坂徳右衛門方へ預ケ、

依頼ス、 依テ旧君臣ノ情実ヨリシテ自然鄭重ノ患ヲ免レ難キカ

ト存候、 ヲ希望ス、 是等ノ旧習ヲ一切擲却シ、 衣服其他ノ事節子ヨリー 身体健剛ノ鞠育ヲ専要トス 層軽便簡易ヲ以テ、之レ

二関スル要務ヲ注存施設スヘシ

ル

明治十一年四月廿六日

命名

四月廿九日本日御誕生様御七夜二付、

左之通御名被進之

里子 此訓佐登

明治十一年戊寅四月廿九日

正二位慶永撰

命名出典

土性

七画艮富貴高名上

里子 此訓佐登

論語日里仁為美択不処仁焉得智

明治十一年四月廿九日

正二位松平慶永撰

同日御誕生様御名正二位様ゟ被進ニ相成、 里子様と奉称候様被仰

出候

平民同様ノ養育

但里子様御七夜御祝二付、 御家従・大奥并家丁・家婢ニ至ル迄

小豆飯・煮〆等被下之、 外ニ大奥上下婢へ夫々御目録被下ニ

相成候

几 月三十日部長局江左之通御届

出産命名御届

私妾 ふち

本月廿三日午後十一時分娩、女子出生里卜命名候、依而此段御

届仕候也

明治十一年四月三十日

第四部華族

宮内卿徳大寺実則殿

男等出席之上岩倉公御演達ニ而、 候処、 配候処、 給料請求筋当否如何之目途御尋問有之、 部長山内公・南部公・板倉公其他部長局役員、属官香渡勝 テ株主御関係無之義ハ寔ニ宜しく、 ハ石油株主之御関係無之趣ヲ以答弁候処、 石油株主之華族数名御出頭、 先ハ株ニ関係無之重畳云々ナリ、 今般石油会社ニ係る洋人タン氏 実ハ麝香間ニも有之大イニ心 督部長岩倉公・東久世公を始 然ル処御当家御名ニ於テ 岩倉公日ク慶永殿ニ於 依テ傍聴畢り一統退出 御家令武田正規出 頭

来ル七日仮皇居御苑衆華族江拝観被為免候条、同日午後一時を五月四日左之通り部長局より之御達、御一族中江御通知相成候

此段も可被心得候

六時迄之内家族同伴参向可被致候、

尤晴雨共拝観被指免候二付

追而本文家族之向ハ七歳以上ニ限り候事

一従者ハ拝観不相成候事

一履物ハ沓并草履之事

但雨天之節ハ此限ニあらす

十一月四日

副督部長

追而前書之趣該族中江御通知可有之候也

東久世副督部長ゟ演説ニハ、来ル七日・八日皇居御庭拝見被

仰付旨達有之、別紙八通族長へ被相渡

拝観之輩平常服着用之事

青山御所表門へ名刺差出通行之事

但当日ニ限り御門鑑札持参ニ不及候事

拝観道筋

より蓮池ヲ左旋シ丸山口御花園ゟ梅林等拝見九ノ門ヲ出、順・洗心亭・同所御庭門ヲ出、御馬場横切り洋館脇御花園、夫青山表門ヲ入左へ五ノ門ヲ入り、御花園及御外庭萩の御茶屋

路退散之事

罷越、武田正規御先着罷越候事、今村坦母為御迎参上御逢御酒肴江御移り、為御養育御寄留相成候事、御乳持并崎尾御同馬車ニ而一五月七日里子様御義本日午後二時御発車、板橋平尾牧場今村坦方

御土産

御膳等被下置候

金千疋

奉書紬 壱反 花葵御紋形添

今村 坦

同人祖母な

 基中半
 右
 右

 市学紙
 同
 同

 丁筆壱束
 対

同人妻ちり

同人養母時

同人倅潤蔵

取扱被成候

五月十三日御側仕ふじ儀産後本日出勤、

依而頂戴物等先規之通御

ちり

めん縫取襟

同人女

無并明石家同断之一件御尋問ニ相成候

同日部長南部信民殿御来邸、

右者御家ニ於テ石油株主之御関係有

賊ハ石川県士族

賊被切害候

五月十四日午前八時比大久保内務卿参内ノ際、

赤坂喰違ニ於テ為

島田一郎

長 連豪

杉本乙菊

多 は 正 万 一

杉本文一

島根県士族浅井寿馬

同

. 日昨年西南之役大坂陸軍病院負傷者江、

為慰問鶏卵

榕柑被遣

は、以下により「万瓦」は「日だけ」では、日には、候代価、取調指出候様本日警視局ゟ達ニ付、伊達家ニ而西園寺公

成、池田家ニ而河崎真胤等江御家令照会ニ相成候

五月十五日内務卿大久保殿江為棺拝被為入候

但シ御参内御帰掛大久保邸江被為入候処、高崎正風参合、内務

卿公ニ者格別御懇意之事ニ候間、遺骸御対面可被下との事ニ而

御親謁被遊候

一左之通触示有之

今十四日参議大久保利通参朝之途上ニ於テ、凶賊之為ニ重創

を負ひ終ニ薨去候条、此旨相達候事

明治十一年五月十四日

但凶賊石川県士族島田一郎・同杉本乙菊・同長連豪・同脇田

巧一·同杉本文一·島根県士族浅井寿馬六名即時就捕縛候事

一五月十六日

明十七日大久保贈右大臣葬儀ニ会する者着服之儀、別紙之通太

政官ゟ申来候間、為御心得此段申進候也

十一年五月十六日

宮内書記官

正二位松平慶永殿

明十七日大久保贈右大臣葬儀ニ会する者、大礼服着用襟紐・手

袋黒色を用ユヘシ

但大礼服無之者上下黒色礼服着用不苦候事

明治十一年五

宮内書記官御中

右之通内閣申合セニ相成候間、 為御心得此段申進候也

居豊穎、 勲殿 向 五月十七日贈右大臣大久保利通公葬送二付本日正午御 日. 車大礼服御着用御襟紐・御手袋黒色御用ヒ三年坂大久保邸江 任官・麝香間詰各玉串を捧け拝礼、 皇族有栖川宮・東伏見宮・北白川宮・閑院宮・ 三年坂邸ヨリ青山葬地迄御随送、 ら御都合次第御棺拝不苦旨申出候ニ付御拝、 御休息所にて御小憩、 ・広幡忠礼殿・ 御服御凶装ハ御礼帽金飾之分黒紗ニ而御包ミ針留ニて、 金鍔迄之処黒紗ニ而御覆ひ、 勅任官 伊達宗城殿· 供饌九台祝詞畢り、 ·麝香間御 嵯峨実愛殿・長谷信篤殿・壬生基修殿ナリ、 亀井茲監殿·池田章政殿御五人也、 夫
る御帰邸ニ相成 同二御休息、 親族・ 御左腕金紋之処同御包ミ相成候事 葬儀ハ祭主平山省斎、 勅使・皇大皇宮皇后宮御 御同席ニ 此節御同列之方々者浅野長 玉串御供被遊候 而御先着ハ近衛忠熙 両大臣・参議・勅 出門、 高崎正 副祭主本 御 <u>|</u>剣モ 御馬 使 御 風

五月十八日左之御廻章相達候

折 疎 前 情 略 々者懇会を遂、 元武家者積年之旧誼も有之平素懇親可致 二相渉り中ニ者面晤を不遂族も有之、 志想を吐露シ信義を厚ク致候得者、 甚以遺憾之至ニ存候 勿論之処、 皇国之為

> 招請候而 相催度存候、 協議致候ニも都合可然と致考合候間、 般ニ而 ハ如何可有之哉及御相談候 ハ余り多人数之儀ニも有之候間、 依而願ハクハ御催主ニ御 御同意二候得者近日懇会 御存趣早々芳名之下江 加り被下度存候、 先元旧藩以 上之輩 尤旧 武

加毫被下度存候也

五月十六日

池田章政

浅野長動

徳川慶勝殿

松平慶永殿

亀井茲監殿

細 川護久殿

Ш 内豊範殿

五月廿日第二部長南部信民殿御留守中二付、 上杉茂憲殿より

達

有之、 而 ハ、 追而募金御指出 内国債募集金之儀ニ付御応シ之方者、 右ニ付而ハ来ル廿八日迄ニ各家ゟ募金額御認族長迄御指出 付御認メ御指出有之度候事、 御銘々御都合次第二ハ候得共、 左候ハヽ 族長ニ而取纏メ一紙ニ部長江指出候様可致事 族長ニ於て取纏メー ハ第一銀行又ハ三井銀行江御指出之儀ニ付 右金額御銘々御書付御差出 三井銀行江御指出之方可 紙二致シ取斗可 来ル卅日迄ニ募金額 申

五月廿四日里子様御産神御参拝二付午後一 御参詣被遊候 里子様より 同断御手前被下 右何茂江御料理被下之 金百疋 金百疋 金壱円弐拾五銭 扇子壱本 鼻紙壱束 金弐百疋 行も御認御申出可有之事 然候、 羽織紐一懸 名二而御返却可有之候也 前文募金御認御指出之節、 右之通被達候間此旨申入候、 御初穂 明治十一年五月廿日 但族長迄御申出可有之事 乍併第一銀行江御指出相成候而も宜候事 金弐拾銭被供之 第 廿四類族長松平慶永 令扶へも被示、 銀行歟三井銀行歟御指出之銀 時御出門、 崎尾 今村 御乳持江 同人祖母 此廻状ハ拙者宛 坦母 牛天神宮江 参賀、 五月廿八日皇后宮御誕辰二付午前九時御出門御参朝、 五月廿六日故内閣顧問木戸孝允殿一周忌二付、 御祝酒御頂戴、 有之ニ付、 但シ前以毛利元徳殿ゟ御出会可被下旨御通知相成候 右被下ニ相成候 同壱円 日ク 同五拾銭 同七拾五銭 同弐拾五銭 同弐拾五銭 同七拾五銭 第十一時於御内儀勅任官・麝香間詰江皇后宮御謁見、 正午十二時御来臨被下度、 者旧因之者申会法会執行致候、 本月廿六日贈正二位木戸孝允一周忌二付、 五月廿一日 旧因之者一統相集候旨二而、 松平慶永殿 御退朝相成候 赤飯代 此段御案内申上候也 就而ハ麁飯指上度乍御苦労 午時より御会合相成候 元利元徳 於築地本願寺回向 ふじ江 下婢江 きせ 小野田 駒野 ふし親江 於築地本願寺拙 宮内省江御

一五月三十日左之通部長局へ御指出相成候

今般各家応募之金額通貨ハ各自ら直々該銀行江照会可差出哉

又ハ族長ニ而取纏メ御局江指出可申哉、至急御指令被下度

此

段申入候也

明治十一年五月三十日

廿四類族長松平慶永

上杉茂憲殿

茂憲殿御逢ニ而内国債募集金御指出方之儀ハ、部長第二課江取纏同日部長局江老公御呼出ニ付御代理武田正規出頭候処、部長上杉

御内諭有之候事

メ御依頼相成方可然哉之御演説、

其他内国債証利子元金得失利害

同日左之御廻章御指出相成候

今般内国公債応募出金之義ハ、華族部長局第二課ニ於テ三井銀

行江申込手続被取斗候樣及依頼候間、此段御承知可被成候也

明治十一年五月卅日

廿四類族長松平慶永

御一族御宛

五月三十一日午後四時頃部長上杉茂憲殿御来邸、右者御一族内国

之趣ヲ以御断申上候

債募集今一

層御奮発御出金候様御奨励有之二付、

各家無拠事故有

今般御評議之上券面ニ出来ニ付、両公御捺印相成候事

六月一日丁卯 · 戊辰以来有功之面々江御賞典禄御分授相成居候処

六月二日秀康公御祭典二付例年之通御祭式御執行、御祭主正二位

本多副元・村田氏寿・松平正直

伊藤輔陪侍被仰付候

様

· 副御祭主正四位様御執務、

入可申旨ニ相答置候曾而鉄道組合之方江出金致置候壱万七千七百余円之金額を以、加一六月六日本日海上保嶮会社創立会議ニ付御家令武田正規出頭演述

六月九日左之通御一族中江御代理ニ而御通知相成候

成候処、督部長東久世公ゟ御演説ニ而蜂須賀茂韶殿銀行除名ニ以輪札拝啓、陳者去ル八日慶永様御代理茂昭様会館江御出頭相

寄、右株数全額充足之方法華族会館資本金拾六万円を以買入候

募金致度候間、各家増加入望之者ハ来ル十五日迄ニ取調申出候旨及通知候得共、右借入方調兼候ニ付蜂須賀家株跡千株を更ニ

日中ニ必ス御報告被下度、此旨各位迄拝啓候様慶永様御申付被様御演達有之候間、前文御承知御伺之上御増加之有無来ル十四

成候、依而此段及御通知候也

明治十一年六月九日

松平慶永様御家令

同日 六月十二日正二位様午後 六月十五日左之通御届御指出相成候 六月十日大久保利和殿より左之通 日祭江御会場被遊候 別記 段及御届候也 先般蜂須賀茂韶銀行除名二寄、 但シ福井表ゟ御呼寄ニ付本日着候也 贈右大臣大久保利通五十日祭執行候ニ付粗茶進上致候条、 出候様御演達之趣、 十二日午後第二時御来駕を乞フ 弐拾五株加入 七拾株加入 明治十一年六月十五日 御家従被仰付 岩倉具視殿 松平慶永殿 月 日 一族共江致通知候処、 時御出車、 右株跡増加入望之者有無取調申 廿四類族長 従五位大久保利和 贈右大臣大久保利通公五十 松平直致 松平茂昭 鈴木準道 別記之通申出候間此 来ル 六月十六日左之通 間、 右現貨公債両様之内指出方取調候処、 詳細御調、 右現貨を以御出金相成候哉、又ハ公債証書ニ而御指出相成候哉 一七拾株 弐拾五株 同断 同断 同 同断 十五銀行增株加入 十一年六月十五日 十五国立銀行增株加入 未決早々可届出候 加入望無之 此段御了知被下度候也 X 松平慶永殿 七拾株 弐拾五株 明十六日中御申出可有之、 同人江御通知有之度候也 両人共現貨を以出金致候 松平茂昭 松平直致 松平直致 松平茂昭 松平直静 松平篤郎 松平明丸 松平定安 松平直哉

十一年六月十六日 廿四類族長松平慶永

部長局第二課御中

七月一日本日松栄院様様子御正忌二付御祭典執行、

正二位様御祭主

正四位樣副御祭主御執務御手備被遊候

松平直哉

松平直静

松平直方

右十五銀行増株加入之儀ニ付未定之趣御届申上置候処、

加入希

望無之旨申出候間此段御届申上候也

十一年六月十七日

廿四類族長松平慶永

督部長岩倉具視殿

六月廿二日松平直春様老公兼々御病気之処、 御医薬無御験本日御

逝去相成奉恐入候、 右二付正二位様直二為御悔御尋被遊候

六月廿四日本日華族会館ニ於テ議員投票ニ付御参館被遊候

同日左之通

松平慶永

右同日御族中投票を以議員ニ御撰挙相成候間、 此段申入置候

最本人より御通知有之度候也

六月廿四日

華族会館

廿四類族長松平慶永殿

同日左之通御一族中江御通知相成候

族銘鑑ニも御記載無之、 直方殿御祖父松平典則殿先年来御旧地御住居故、 部長局会館ゟも典則殿御名無之、 其仕来を以華

華族之御取扱ニも自然脱漏之趣有之、 族長廻章ニも認不申甚不

都合之儀、 全ク族長不行届之儀ト不堪恐縮、 依之本日参館之節

部長局并会館江も及照会、 以来者廻章江典則殿ヲ加へ且従会館

有之候積談置候間、 年始会館式初其他ニも、 以来ハ廻状等明丸殿御次江典則殿御名御差 典則殿無位華族松平篤郎殿御同様待遇

加へ候間、 為御心得申入候也

明治十一年七月一日

廿四類族長松平慶永

御一族御一統

尚 々典則殿兼而御病気之事故御捺印之儀ハ戸主御代理ニ而宜候

事

七月三日左之通

青山御所謁見所新築落成二付、 来ル五日午後 時被為召候間

同御所江参上可有之、

此段申入候也

十一年七月三日

宮内卿徳大寺実則

正二位松平慶永殿

追 而今般同所江便宜仮能舞台御取建、 当日番組皇太后宮江被進

候二付御陪覧可有之、 此段申入候也

但 御請書御指出相成候

## 同日左之通

青山御所御車寄今般新築落成二付、 来ル四日ゟ華族之輩参上之

節者同所
ら昇降
可有之、 此段相達候也

七月二日

七月三日

宮内卿徳大寺実則

前文之通達有之ニ付、 如先規其族中江御通知可有之候也

副督部長東久世通禧

七月五 Ä 華族銘鑑壱部ツヽ部長局ゟ御渡ニ而御受取相成候

御菓子 華族、 同日午第十二時御出門、 頂戴 御酒御頂戴、 見 臣 玉坐御左之間、 ・北白川宮、 参議 御舞台正面聖上・皇后宮御出座無之の天覧、 畢而: 御正面ヨリ右之方各部長・華族奏任官等拝観、 箱ツヽ、 ・勅任官・宮内省奏任官・ 御退出、 畢而御拝見相済皇太后宮ら刺身 御坐敷大臣・参議・勅任官、 女官右ハ御掾頰江有栖川一品宮・二品宮・東伏見 杉折 但御謁見ハ無之 一重壱重ハ 青山御所江御参上御能御拝見、  $\square$ 取、 麝香間詰· 壱重 御右三之間麝香間詰 御取肴二而御飯御 各部有位華族等拝 酢 御覧女官等侍 刺 御中入二而 身 皇族 吸 物 大

## 御能番組

三本柱 翁 千歳 下野岩吉 野村与作 小督 三番叟 観世銕之丞 三宅庄次郎 道成寺 養老 宝生九郎 金剛唯

花子 三宅庄 郎 中入 正尊 梅若実 千切木 野村与作

土蜘 金剛泰一 郎 祝言

同日松平直春樣至誠院殿二七日御法事御執行 御執行、 次郎様御経中御詰被遊候、 御代拝武田正規江被仰付候 依之正二位様 御簾中様ゟ御附御法事 付、 正 兀 位 様

## 七月八日左之通

船二被為成候旨被仰出候二付、 同八時新橋発之汽車乗御、 扶桑・比叡・金剛之三艦為天覧、 横浜港江行幸、 供奉被仰付候間、 来ル十日七時二十分御出門、 東海鎮守府ニ於テ該 東海鎮守府

明治十一年七月八日

御先着可有之候、

此段及御達候也

宮内卿徳大寺実則

正二位松平慶永殿

追而雨天之節ハ御順延、 着服之儀ハフロツクコ ٢٥ ヅボン之

儀 ハ勝手次第ニ候也

所労ヲ以御不参御断 但シ即刻御請書御指出 宮内省江御断 二相成候○十日青松院様御正忌ニ ニ相成候

一七月十日礼井命御正忌ニ付鍋島筆姫様被仰進御執行相成候、但シ

午前十時御式相始り候事

同日節子様御送籍、松平明丸様ゟ御廻ニ相成候

但シ翌十七日区務所江御届被成候処請証相渡候ニ付、直ニ御家

令中沢広江迄御廻し相成候

一七月十二日

来ル十五日工部大学校開校式ニ付臨幸被為在候条、大礼服着用

午前八時同校江参集可有之、此段申入候也

十一年七月十二日

式部頭坊城俊政

追而次第書御廻し申入候、且不参之節ハ同校当寮出張所江届書

御差出可有之候也

同日宮内省ら

新艦扶桑号・比叡号・金剛号之三軍艦拝見之義、別紙之通海軍

省ヨリ広告有之候間、為御心得申入候也

七月十二日

宮内卿徳大寺実則

海軍省広告

新艦扶桑号・比叡号・金剛号、於横浜日数十日間拝見ヲ許

但前三日ハ皇族・華族・諸官員之家族トシ、後七日ヲ一般人

民トス、拝見之者横浜鎮守府ヨリ切手可受取事

但来ル十日叡覧被仰出候ニ付、其翌日ゟ拝見日数起算之儀

ニ可心得候事

飯田橋より御乗船ニ而向島千歳楼江被為入候

同日正二位様支那公使何如璋ゟ御招待申上候ニ付午後!

一時御

出門、

日里子様御義御種痘被遊候二付、大野松斎江御依頼相成候

同

御拝見被遊、十一時四分発汽車ニ而東京江御着、停車場より人力召横浜江御着、鎮守府ゟ手続之通端舟江被為召、金剛次ニ扶桑艦一七月十三日午前七時御出門御洋新橋停車場午前七時発汽車江被為

車二而暮時前御帰邸被遊候

卅分主上臨幸御式有り、諸教場御巡覧、試験・講議等御覧、御昼一七月十五日工部大学校開校式ニ付午前七時御出門御参校、同八時

餐太政大臣以下御陪食、畢而第一時前還幸、継而御退出被遊候

大野松斎方江被為入御種植被遊候

同日里子様御種痘ニ付午前八時御寄宿ら御来邸、

夫より浅草仲町

田正規御名代ニ而会葬被仰付候、左之御誄詞御手向被遊、前日御一同日御旧臣陸軍一等軍医橋本綱維此程病死之処本日発葬ニ付、武

家従ヲ以同人宅江御遣シ相成候

天其病乎癒志人乃命乎救布其功乎天皇賀褒免給比賞伝給比熱四等乎 嗚呼 乃饌乎備既手向留己乃心乎受坐土白須 図 都留古身退坐都留渡嗚呼哀起加君賀遺骸乎東京仁送里明日波葬乃 賜布此旧主慶永毛亦空蟬乃世人仁向比誉奈今茲六月浪華仁赴岐不 仁注岐彼国乃医乃教乎学比其奥所毛詳仁知留故其著起功仁由利 乃国乃黎庶乎救半牟医乃道仁心乎寄世往日開如時里目乎西洋乃異国 幾時与父乃志乎継岐兄綱紀大人士与仁朝廷乎美美常石汝鋪島乃大倭 式乎為登聞仁息家 従乎君賀家仁差 遣忌己乃代仁神 霊乎拝満志榊土此 乃薩摩乃国乃乱仁浪華仁大命乎奉引此病院仁赴幾多乃負傷者乃看護 乃官位乎朝廷与賜布所积君重起此職乎荷比昼夜勤美励美殊更仁隼人 痛症起陸軍省一 等軍医正従六位勲四等橋本綱維乃君波年若

明 治十一年七月十四日

七月十八日

来ル廿日正午十二時三十分竜田法隆寺ゟ献上之古器物陳列致候

間 拝観被成度候ハ 御参内可有之、 此段申入候也

十 一年七月十八日

宮内省当番

右被示候間刻付ニ而明晩中ニ御通シ可被下候也

七月廿日午前十 **ゟ献上之古器物** 時御出門御参内、 小御所ニ陳列有之候を御拝見ニ 天機御伺之上、 一相成候 竜田法隆寺等

> 同 ]日鷹司 輔熙公薨去二付九条道孝公江御委托、 左之通御 備 相 成

金七拾銭

仰出、 七月廿四日今般福井御泉水邸御地処之内拝借、 校名御撰之義正二位様江願申上候処、 御家令より大井弥十郎迄其旨申越相成候 右数名之内二而採択候樣被 小学校建築ニ付右

原泉 化育 溥淵 修道 修養

右之内原泉ニ仕度旨ニ而其段申上 相 成

七月廿六日建宮御容体之儀ニ付、宮内大書記官堤正誼御旧臣 調相成候処、 左之通申上ニ相成候 江 御 取

建宮昨夜来別二御変動不被為在候得共、 御昏睡状之御寝二而 聢

与御目覚も不被為在 御 ・哺乳も無之益御疲労ト奉診候、 此段申

七月廿六日午前六時半

建宮御殿詰侍医

被遊薨去候旨、 右ニ付午後 時御出門、 依而直 建宮御殿江為伺被為入候処、 午後三

二御参内天機御伺

夫ゟ青山御所江

同

断

参上相成午後五時前御帰邸被遊候

同 日里子 樣御種痘御順当二而被為済候旨、 御寄宿今村坦 申 柏 成

候

同日左之通御布告

三品敬仁親王御儀今廿六日午後二時三十分薨去被遊候条、此段

及御達候也

十一年七月廿六日

宮内卿徳大寺実則

正二位松平慶永殿

七月廿七日三品敬仁親王昨廿六日薨去被遊侯条、此旨布告候事

但シ三日之間ヨリ算スベシ哥舞音曲令停止候条、尤東京府下ハ

御葬送日迄可為停止事

明治十一年七月廿七日 太政大臣三条実美

別紙ノ如ク公布有之候ニ付、邸内家従并貸地・貸長屋之子供騒

き候事、并ニ太鼓等叩き候義遠慮可有之、且又官令容易ニ廻リ

来らさる故ニ、此官令を写し岩屋政へも廻送可有之、此旨布告

修事

明治十一年七月廿七日

御名 御印

七月廿八日里子様御儀御種痘無御滞被為済候二付、右為御謝義鈴

木準道御使ニ而左之通御贈り相成候

金弐千疋

| 粕テーラ壱箱

、金弐百疋車夫江

野松斎

ヲ以テ施療ノ

方法頗窒礙ヲ生スルニ至ル、

因テ起工ノ議成リ経

乃本月某日ヲト

セサル者ナキニ至ルヲ以テ、

該病院モ規模狭少ナル旧慣ノ病室

営従事数月ヲ出スシテ全ク其功ヲ竣ルニ至ル、

受洪江御代理御委嘱、左之通御直書を以被仰遣候之両公御代理臨場相成度旨同院長馬島健吉より御依頼申上、則毛七月卅一日今般福井病院新築竣功ニ付八月中旬頃開院式執行、依

池拠

福井病院築造成功ニ付、来月中澣開院式執行之趣ニ付、当日欠

苦労為代理参場有之度、此旨及依頼候也

但祝詞御渡申候事

明治十一年七月卅一日 正二位松平慶永

毛受 洪殿

医療ノ貴重スヘキハ之ヲ知得スル者嘗テ無キニ非サリシモ、 ムル 日幸ニ明世ニ遭遇シ懇篤ナル県令ノ注意ト徳望アル院長ノ忠誠 フニ人ヲシテ生活セシムル者ハ五穀ナリ、 シテ開院式ノ盛典ヲ挙ルヲ聞ク、 者ハ百薬ナリ、 飲食ノ貴重スヘキハ之ヲ了解ストイヘトモ 豊賀セサルヘケンヤ、 予等惟 人ヲシテ健康ナラシ

トヲ体認シ、 未開ノ人心モ該院ト共ニ日ニ新ニ月ニ盛ニシテ、

開化ノ度ニ進歩センコト信シテ疑ヲ容レサル所ナリ、 予等乃旧

ス、 臣民ニ企望スルニ越前全国ヲ救済スル至重至大ノ聖恩ヲ遺忘セ 且生徒等蠡測ノ陋劣ヲ反省シ、 夙夜黽勉進歩ノ域ニ到ルヲ

以テス、 爰ニ感泣ノ情思ト故交ノ婆心トヲ歴叙シ、 旧臣々々ニ

附托シ予等ニ代リテ参場シ朗読シテ以テ祝詞ニ充テシム

明治十一年八月

日

正四位松平茂昭

正 一位松平慶永

別紙之通太政大臣より被相達候条、 此段相達候事

建宮御葬送供奉之節ハ従前之大礼服着用不苦、 若又大礼服所持

無之輩者小礼服着用可有之事

麝香間祗候之輩自今大礼服着用之節勅任官大礼服着用可 致 此

旨其省ゟ可相達候事、 但等級標条ヲ付セ

明治十一年七月卅 日 太政大臣三条実美

別紙之通太政官ヨリ被達候条、 此段相達候也

明治十一年七月卅 日 宮内卿徳大寺実則

三品敬仁親王来ル八月二日午前第七時御出棺御葬送ニ付、 在京

> 之奏任官以上麝香間祗候及華族之輩、 当日ゟ三日之内天機伺ト

シテ宮内省江参上可致、 此旨相達候事

明治十一年七月卅 H 太政大臣三条実美

八月一日建宮御殿江為御棺拝御参上相 成

八月二日本日建宮敬仁親王御葬送二付、 入御弁当御戴、 御出棺御供奉、 為召御馬車建宮御殿江御参上、 夫より御埋棺前御祭式御執行ニ而御拝礼被為済 第十時四十分豊島岡へ御着棺ニ付御休息所江被為 麝香間御休息所江御扣、 午前四時四十分大礼服被 夫ゟ七時

午後 時御帰邸

八月三日故池田慶徳殿御一 周祭ニ付、 午後 一時ゟ池田輝知殿御邸

被為入御会祭相成候

菓物 壱対 榊壱対

右御備被相成候

八月七日正二位様御歯為御療治、 京橋区采女町歯医師小幡英之助

方へ被為入

八月九日予而藤島神社宮司ゟ願込ニ相成候同社碑文之義 承知ニ相成其段御家令より宮司へ達ニ相成候

八月十七日石 油訴訟事件落結勝利と相成候ニ付、 九条殿御両家被

仰合、 左之通御取扱相成候

金千疋 金千疋

> 社長 島本仲道江

代言人吉川直簡江

右御家令御使ニ而御取扱相成候、 尤御両家御合併二而如斯御取扱

相成候事

八月十五日拾五銀行株券四十三株蜂須賀家ゟ御譲受ニ相成、(マ丶) 人御調印正四位様より正二位様江御願ニ相成、 御捺印二相成候 右証

同日伊達宗城殿ゟ御廻章左之通

寄附候儀、 以輪札拝啓仕候、 之内御加入も被成候ハヽ 久我・柳原等被申合宮内省江願立相成候ニ付、 各位愈御清安奉賀候、 御 同可申 电 然者豊島岡之陵江堀井 尤可申入筋二者無御坐

成候旨、

御報知有之候

尚尊慮之儀無御腹臟被仰示度、 至急及御照会候也

伊達宗城

正二位様

正四位様

前八分従皇宮四谷御門

·麴町半蔵御門

竹橋御門

錦町通目鏡

麝香間祗候御連名

八月廿四 天機為御伺御参朝被遊候 日竹橋内近衛兵営中騒擾之儀有之、

同日本多副元家格御引立嘆願ニ付、

正二位様江右御推轂筋御依願

八月廿五日斉承命御忌月祭二付、

両公正副御祭主御執務被遊候

但シ公他日岩倉公江御対顔委細御直話, 願書等之儀も御相談相

八月廿八日左之通

来ル三十日御発輦ニ付、 礼服着用午前六時三十分皇居江参上、

板橋駅迄奉送、 此段申入候也

八月廿八日

式部頭坊城俊政

八月卅日酒井鐐姫様・於錦様、 羽州大泉表へ本月廿三日御着ニ相

同日主上北陸道御巡幸御発輦二付、 午前五時半御出門、 御奉送相

成候 御同車

御列坐、 香間・奏任官へ祝酒賜ハリ、 五時三十分御出門、 但北陸東海御巡幸御奉送相成候ニ付、 大臣 ・参議 小礼服馬車御参内小御所ニ於テ勅任官・麝 · 麝香間之方々江御謁見相済、 於常御殿聖上・皇太后宮・皇后宮 本日午前四時十分御目覚 御発輦八時

々者 江御引取 於同所御見送被仰上、 橋 松村孫兵衛宅ニ而 聖堂裏神田明神前より本郷板橋駅ニ而御休憩、 直二御命車 ·嵯峨殿御同乗御帰邸相成候 畢而両皇后宮還啓二付御見立 折詰御弁当御拝戴、 十二時前六分御発車 但 旦 麝香間之方 ]嵯峨殿御 一御休息

馬車御所有無之ニ付、 御同乗御頼込相成候也

御巡幸御留守中両皇后宮江御機嫌御伺、 御同列被仰合日割を以

御出勤相成候

午前 九月二日静寛院宮御 八時御出門御参詣被遊候 一周祭ニ付、 於芝增上寺御法事御執行有之、

時 の花 壱対

右 御供ニ相成候

九月十三日三品親王敬仁尊五十日御祭典二付、 八時御出門、 建御殿江御参上 御祭場江御陪侍御拝礼、 小礼服御着用午前 夫ゟ豊島岡

江 御参拝相成候

但シ本日御移霊式御執行相成候

同日予而麝香間御連中被仰合建宮御陵処江掘井戸御寄附二付、 右

経費之方江金三千疋御出金相成候

同 日本多副元参邸、 右者先般家格之儀二付歎願書指出候処、 本日

> 見込も有之候ニ付、 て御評議も有之事、 東京府江呼出ニ而先願家格願出之義ハ下ゟ可願筋無之、 其儘同府ニ歎願書ハ預り置候旨被申渡候、 依 而願書ハ下付候云々、 乍去於東京府申出 政府二於 右

之趣申上置度旨二

出

頭

九月十八日本日渋沢栄一・ 御招待ニ相成、 斡旋方御依頼相成候二付、 午後五時より同軒江御出向御勧杯相成候 増田克徳海上保険会社創設ニ付、 右為御挨拶会社 統より 突地精

九月廿三日毛受洪ゟ呈書、 公御代理無滞相勤候旨上申ニ相成候 去ル十二日福井病院開業式江

出

両

同 日徳川慶頼様御三年御祭典二付午前八時御出門、 御会祭相成候

御参詣、 十月三日故中根雪江 も邸費を以建てられしなり、 親祭御祝詞御朗読、 御手自榊御供被下候、 進饌御手備等被成下、 周年二付於御祠堂祭儀御執行、 墓誌左の如し 雪江の墓誌は慶永公の選文、 祭儀畢海晏寺墓前 正 一位様御 江

中根雪江墓表

能使余尽藩屛之任者独有中根雪江焉 余嘗主越前時謀議之臣不乏、 人其処身節倹自守粗衣短袴非敗不換 其 人而参予機密応対四方以 性好学於書無不窺尤留心 雪江天資沈静寡言愛才容 **人**賛治化

後雖在劇職鉛槧無倦色其詞賦唱酬直吐肺腑不事雕鏤、嘉永六年邦典、壮年負笈東遊、師平田篤胤従遊有年、喜主張尊王之説、

列侯議防海時、雪江在江戸当路之人就以諮詢焉、雪江詳述利害夏六月亜墨利加合衆国使船至浦賀港要求通商、辺境繹騒幕府命

得失無有所遺其言皆中肯綮聴者無不歎服由、是雪江名益顕于世

問意見時、雪江亦徴拝参与職明治元年正月為徴士屢往来京摂之慶応末年幕府還政之儀起、廷議徴集列侯及有志・諸士于京師遍

間、料理庶政尋管駅逓租税等事務、皆始就端緒其罷職還郷也

弋山釣水優游自適、若不復知務為何物今茲十年春雪江上京謝恩給賞典禄百五十石於是買田宅於城北坂井郡以為投老之地、暇則辱拝竜顔賞賜以物二年九月特勅賜禄四百石、三年四月余家亦頒

若干以助祭粢、嗚呼雪江好講実学蘊蓄深遠遭遇明時以施之事業

偶罹疾遂死于寓館事聞内廷、

宸悼之余賜金

尋来東京滞留経月、

雪江名師質通称靫負、雪江晚年所号其先出自従五位下讃岐守平

曾祖衆美祖衆久父衆諧母平本氏以文化四年丁卯七月三日

忠正、

終成

其功可謂死有余栄矣、其子牛介具状来乞、

余文以表其墓

七十一以死、配荒川氏先死継室水谷氏三男七女、嫡即牛介荒川生天保元年庚寅十月襲禄七百石歴任諸職、明治十年十月三日年

氏所生次曰西一側室小沢氏之出三女嫁人、余皆夭

明治十年十二月

正二位源慶永撰並書

水菓子 一台 榊 一筒

十月十日福井原泉学校額面及懸軸御認二而御附与二相成、則御家

令ら該黌江送致相成候

称旨被仰出、則額面御揮毫御送致相成候十月十二日福井御泉水邸邸号之儀、正二位様御撰ニ而浴恩閣と可

取る

「中月十六日両皇后宮幼稚園行啓之節之御歌を唱ふ、笏琴ニ而調子を上の野面側頂戴取者・刺身・煮者両皇后宮御手酌御盃御拝領職が手殿侍が新殿両皇后宮御出席、諸宮方・万里小路博房卿・元田永孚殿侍が新殿両皇后宮御出席、諸宮方・万里小路博房卿・元田永孚殿侍を楽有り、皇后宮幼稚園行啓之節之御歌を唱ふ、笏琴ニ而調子を奏楽有り、皇后宮幼稚園行啓之節之御歌を唱ふ、笏琴ニ而調子を表書している。

みかゝすは玉もかゝミも何かせんまなひの道もかくそ有りけり

相済御礼被仰上御退出

意看病不行届趣を以左之金額被下ニ相成候一十月十七日御側仕ふし親糟屋十郎兵衛大病之処、兼而勝手向不如

金弐拾円

右為御手当被下候

同日学習院臨幸一周年ニ付祝宴開張、 依而午後三時ら御出会相成

候

十月廿六日御側仕ふし実父糟屋十郎兵衛病死之処、 渋之趣ニ而跡吊方行届兼候次第も有之ニ付、 正二位様御内証金之 兼而勝手向難

内ゟ為祭資料弐拾円被下ニ相成候

祭葬後迄藤義滞留霊前伽等致候様思召を以被仰出、 賜物等有之

候

節子様・里子様ゟ花壱対ヲ被供候

十一月二日故建宮御百日祭二付、 午前九時御出門豊島岡江御参拝

被遊候

同日松平直巳様御家政向近来彼是御差紛之義有之候処、今般御

·松平直巳様御参邸、 外二浅井晴文并二平岡勝蔵雲州様院従

今般御改正筋御熟談二而午後一

時より松平直哉

遊候

御着之上御所并青山御所江御参賀被遊候

族様へも御相談、

左之通御依頼相成候

平岡勝蔵

乍御苦労家務

切御担任可

有之、 此段及依頼候也

松平篤郎殿今般御家政御改正二付、

明治十一年十一月二日

松平確堂

松平慶永

平岡勝蔵殿

浅井晴文江ハ御演舌ニ而、 松平直巳殿御家政筋平岡勝蔵

加談之儀 御依頼二相成候

十一月八日

金拾円 反物料

鶏卵 壱箱

右者松平直巳殿御家事向紛紜之儀二付、 仲裁筋御依頼之処御

落結相成候二付、 為御挨拶御家令武田正規御使ニ而御贈り

成候

前十一 十一月九日聖上益御機嫌能本日午後一時還幸御着輦被為在候、 時御出門為御迎新橋停車場迄被為入、 是ら御供奉御随輦被

十一月十五日本日節子様御髪置御祝儀二付

白縮緬 壱反

御守袋 壱

右被進ニ相成候 金七拾五銭

同五拾銭

藤

保坂徳右衛門母 本多永夢

-244 -

右

同

同日

正

一位様

御開宴相成候

同

同

同弐拾五銭

同弐拾五銭

佐野 久

右御特意ニ而被下之

十一月十七日小日向竹島町六十九番丸屋善七石鹼製造所失火之処 御近火ニ付宮内省より御尋御使有之候、 右ニ付即刻御参内御礼被

云ヶ御使ハ仕人ナリ

仰上、

猶侍従中江も御面接御礼被仰上之

十一月廿八日石油会社訴訟事件裁判落結勝利と相成候ニ付、 従一位様御家扶朝山 川家元田・御家御申合ニ而池の端松源楼へ御招き、 御挨拶代言師北洲舎々長島本仲道・吉川直簡之両人ヲ九条家・徳 一位様にも被為入、 藤井、 武田正規・ 徳川様ニ而久留栄・中村徳修赴候 沢木禄平・長谷川皎扈随、 午後四時より 九条 右為

御乳持

崎尾

右今般御巡幸之節、

福井表於行在所拝領物致候為御初穂献上之

毛受

洪

滝

十二月二日左之通御書下ニ相成候

祖代々祭祀一際手厚ニ相成度との主意之趣、 今度佐佳枝廼社及菩提所六ケ寺江数多之金子致寄附、 寔以奇特之至於我

協合講中

等深満足存候、

依而此旨従足下宜挨拶申入呉候様頼存候也

松平茂昭

毛受

毛受洪・勝木十蔵・ 大井弥十郎 · 真杉清蔭 江左之通各诵

寄進、自後吾祖先祭祀一層手厚ニ相成度との旨趣、 今般従協合講中佐佳枝廼社及運正寺を始五ケ寺江許多之金額致 該講ニ付而

於我等深感悦候、 ハ始終其取扱も担任不浅配慮之段、 依而右謝詞申述スル 祖先江対シ格別奇特之至、 ノ証トシテ乍些少目録之

通金弐千疋贈候也

明治十一年十二月一日

松平茂昭

松平慶永

同日九十二銀行開業式ニ付、 御祝詞御遣シ相成候

御簾中様 - 四位様江 金壱円ツヽ

正

十二月五日月並天機御伺御参朝之処、 左之通被仰出候

麝香之間之面々五日・十五日・廿五日参内、 二可参集事、 時卅分頃迄ニハ必参集之事、 刻限ハ 第二時御対面被仰 第 時 頃迄

申 御対面無之事 出

[候事、

其余有事故朝又午後参内候ハ、宮内省侍従迄伺天機可

五.  $\mathbb{H}$ 廿五日青山御所江参上例之通ニ候事

同日予而長崎基近・早見覚哉等江御世譜編纂方御委嘱相成候処、

今般竣功相納候ニ付左之通賜物有之候

当家世譜編纂之儀二付、 般該世譜送致 旨従両人及依頼候処、 閲候処、 速二承諾爾来勤勉其苦労ニ寄忽成功、 昨年夏福井行館ニ於テ専ら担任有之度 体裁簡易ニシテ頗省冗贅、 永世之宝器

と相成感喜之至、 依而其報酬ヲ表シ紋付羽織并金五千疋ヲ送進

候事

明 治十一 年十二月五日

松平茂昭

松平慶永

長崎基近殿

当家世譜編纂之儀兼而依賴致置候処、 ニ付該世譜ヲ送致ス、 依而其喜悦之証ヲ表シ紋付羽織并金七円 数年之労苦二寄今般成功

ヲ贈与候事

明治十一年十二月五

早見覚哉殿

御両名

十二月五日

当家世譜編纂之儀二付先年来及依頼候処、今般成功全部致送致 体裁も相整後来之重器と相成欣喜之至ニ不堪、 全ク足下数

年之従事ニ寄候事と令感謝候、 依之不取敢謝詞申述候也

明治十一年十二月五日 茂昭

慶永

毛受 洪殿

十二月六日左之通被仰出之

自今当省昇降所を以皇族并臣下車寄と相究候条、 此段相達候

十一年十二月六日

宮内卿徳大寺実則

同日松平確堂様、松平定安様・松平直哉・康民様御家令中沢広江 諾ニ相成候 様被仰述候二付、 而御答二ハ暫時ト申候而ハ際限も無之ニ付、 坐候様更二御 樣会館議員并御族長御辞退被成候処、 直亮樣御家令安井泉御召連御来邸、 族御惣代として御頼談被為入候趣御演説有之、 後 一ケ年御頼相成候得共、 今暫時之処是迄之通御勤 正 一位様御逢之処、 老公ニハ半ケ年御承 期限ヲ定メ被仰下候 正 依

十二月八日松平明丸様二而故康倫様御 周忌御法事、 小石川白山

也

指出候

浄土寺ニ於テ御執行相成候ニ付正ニ 一位様御参詣、 左之通被供之

両公よ 御香奠金弐百疋

十二月十四日部長局ゟ左之通

正

一位松平慶永

族中撰挙

為第二十六類族長

明治十一年十二月十四日

部長局

十二月十五日本日吉辰二付従五位広橋賢光殿御妹幾子殿正四位様 御縁組之儀、 御先方様へ御家令武田正規御使ニ而被仰入候処

御 承諾二相成奉恐悦候

十二月十六日前記広橋様御縁組被仰入候処御承諾ニ相成、 今朝御

同家様ゟ為御挨拶御家扶平野輝雄御使ニ而参邸、 正四位様表二而

御逢 正二位様ニハ於御居間御逢御挨拶被仰出候

同日正 一位様会館議員御辞表御差出ニ付、 松平確堂様 へ御連印 御

依 頼ニ 相成、 御使者ヲ以其段被仰進候処、 直二御捺印相成候

十二月十七日正二位様議員御辞表華族会館へ御家扶鈴木準道持参

ニ至兼、 儀仕、 レ爾後勉励可致之処、 華族会館会議々員各族撰挙之趣意ニ寄、 議場何分数時間着床難致 就而者議員難相勤、 客月持痾之痔痛相発シ寒気増加ニ従ひ難 依之何卒解務有之候様致度此段願 種々療養指加候得共更二全癒 過般拙者該族員ニ挙ラ

入候也

明治十一年十二月十七日

正二位松平慶永

钔

華族会館長岩倉具視殿

不得止存候間御聞届相成候様致度、 今般松平慶永儀議員辞退之義被申出候二付、 明治十一年十二月十七日 第廿六類家族惣代 右条添書ヲ以申上 族ニ於テも事実 候也

正二位様江

被進之、

十二月廿四日正二位様御族長御担任之為御挨拶御一族方ゟ左之通

康民様御家令中沢広江参邸ニ付御逢之上御直答被遊候

壱反 壱反

鴨 壱双 青目籠

金千疋

反物

壱

反物 壱

金五百疋

武田正規

中 桹 新 岩倉具視殿

袴地 壱反

鈴木準道

御家従一統

金参百疋

十二月廿四日松平定安様御邸ニ於テ会館議員投票御開札ニ付、 正

六枚

一位様為御立合被為入候処、

松平直哉様

壱枚

松平直致様

三枚 松平茂昭様 御投票数左之通ニ相成候

壱枚 松平定安様

右之通ニ相成候処御多数を以松平直哉様御登任ニ相成候 但シ松平確堂様ニ而御開札相成候様御兼約之処、御感冒被為入

候ニ付定安様御邸へ御転会相成候

同日来ル一月年始御拝礼式部長局ゟ御渡ニ付、 中根新同局江出頭

受取候事

十二月廿五日本日吉辰二付広橋様江御結納為御取替無御滞被為済、 御家従一同恐悦奉申上候